北九州歴史文化遺産　第六十四回

小倉城自焼 その衝撃と歴史的意義はどこに

北九州市小倉のシンボルともいわれ、市民に親しまれている小倉城。その城がかつて国を揺るがす騒動の源の一つになった。江戸時代末期の慶応2年（1866年）に起きた城の自焼もその一つ。その影響は、その後の北九州、日本の歴史にも波紋を残した。今、改めて確認し直したい。

現在の小倉城

小倉城の元祖は永禄12年（1569年）、毛利元就が構えた平城だといわれる。その後、高橋鑑種（あきたね）、毛利勝信（前名：森吉成）を経て慶長7年（1602年）、中津から小倉に移った細川忠興が築城を始め、7年後に完成したのが現在知られる3つの曲輪、唐造りの天守からなる広大な城。このため細川忠興を初代小倉藩主とするのが一般的な見解になっている。

徳川家光時代の寛永9年（1632年）、細川の熊本藩への移動によって徳川家康の曽孫で明石10万石の譜代大名小笠原忠真（ただざね）が九州の探題役として小倉藩主に。天保8年（1837年）、失火により天守閣、本丸御殿を焼失したものの、その後、天守閣を除いて再建し、藩の威厳は変わらない。ところが時代は間もなく大きな転換期に入った。

文久3年（1863年）生麦事件を発端として幕府の攘夷決行布告で長州藩が関門海峡でアメリカ商船を砲撃し、さらに慶応2年（1866年）6月には小倉藩内の門司・田野浦を急襲して占拠、小倉藩に攘夷決行を求めた。だが、譜代で幕府を親とし、その指示を最優先する小倉藩としては受け入れられず、長州征討を打ち出した幕府の先陣として田野浦で長州藩と戦闘。そんな中、同年7月20日に将軍家茂が死去。小倉にいた幕府軍九州総督の老中・小笠原長行（ながみち）が急遽、江戸に、また諸藩も引き揚げて小倉は親族の安志1万石、分家の千束1万石という2つの小藩とだけの孤立状態に追い込まれた。

城自焼は熊本藩士よりの助言か

当時、小倉城の主は小笠原忠幹（ただよし）。だが前年の慶応元年（1865年）9月に病死し、嫡子豊千代丸はまだ3歳で執政家老小宮民部が指揮を握っていた。そのような中での決断が、小倉城自焼であった。それは小倉藩だけでなく時代が幕末から明治、新しい日本に生まれ変わる時と重なった事件でもあった。

その自焼は、書によって内容が微妙に異なるものの、柏木四郎氏「幕末海峡物語」は、小宮は、小倉にいた熊本藩使番の竹崎律次郎より「一戦して敗れて城を焼くのは敗軍の感がある。（中略）力を蓄えて再起戦に主点を置くことが肝要であるが、そのためには自ら城を焼いて要害の地に引き退がり、しかるのち討って出るべきである。戦の術として城を自ら焼くことは兵術の一策であって部門の名折れにならぬ」との言があることを聞き、自焼を決断。小宮民部が独断に近い形で実行に移したもので、島村志津摩などは自焼後に知らされた、と記述している。

小宮は「各陣地は即時撤退をし、藩士の家族は香春採銅所等に避難する。各陣地の兵が撤退を終えれば、小宮邸に火をかけるので、それを合図に城をは示を出し、自らは香春狸山へ引き下がると述べたといわれる。

そして、その慶応2年8月1日（太陽暦1866年9月9日）、自焼。武家屋敷からの藩士家族の逃走が始まり、町家、農家など約3万人余りが城下から逃げ、町人は長州兵が攻めて来ているとみて大混乱。牢屋敷では拘禁されていた山伏たちが次々に惨殺される騒ぎも起こるなどした。結局、藩は田川郡へ撤退、香春に藩庁を置いた。香春にとっては急な騒動、人口、負担増でいい迷惑。同所での百姓一揆の遠因になったともいわれる。翌慶応3年（1867年）1月、島村志津摩らの施策で長州藩との戦いはようやく終了。島村は停戦成立後、請われて執政家老として戦後処理、藩再建に当たった。

歴史表に添えられている、炎上する小倉城の想像写真。小倉城に掲示されている。

藩名も香春藩となった明治2年（1869年）11月、藩は小宮に城自焼等の小倉戦争時の不始末の責任を問い、小宮は同年11月29日、同僚の原主殿の邸で自刃。47歳だった。その小宮の辞世の句が残っている。

「わが君の御代としなりておもふこと　なき身にものを思うこころかな」

「主人の小笠原家を幼き豊千代丸に継承させるために力を尽くし、小倉城自焼等の責任を負って自死する自らを納得させようとする生真面目な心がうかがわれる」と評価する声もある。

城自焼と、市民の城への感慨

郷土史家米津三郎氏は著者「北九州の歴史」で「小笠原氏の小倉入国が徳川の全国支配体制の完成であったと同じように、焼け落ちていく小倉城の姿は、徳川の全国支配体制の終わりを告げる狼火であった」と。さらに「小倉藩の歴史ノート」（美夜古郷土史学校発行）では「小笠原の小倉入部が徳川幕藩体制の完成であるならば、小倉城自焼こそは徳川幕藩体制の終息を告げる象徴的な事件であった、というべきである」とその意義を説明している。

その城は昭和34年（1959年）、市民の要望により天守閣が再建された。天守閣は失火により天保8年（1837年）には消滅していたことから、実に122年ぶりの再現だった。市民の小倉城への想い、感慨が今も残っているようである。

シニアスタッフ　村田和夫

北九州歴史文化塾
講演会

幕末動乱の北九州
小倉城燃ゆ

2024年11月19日（火）
10:30～12:00 <開場10:00>

会場　小倉城庭園研修室（小倉北区城内1-2）
参加費　会員1,500円　一般2,000円（資料代含む）
定員　20名（事前予約制）
申込期限　11月15日（金）

講師　廣崎 篤夫 氏
前八幡郷土史会会長
史学博士

プロフィール
昭和10年小倉市原町生まれ。福岡学芸大学（現福岡教育大学）を卒業。北九州市の文化財を守る会顧問（前会長）。史学博士（歴史学名誉博士）。北九州市民文化功労賞（平成25年度受賞）。教師歴53年。剣道歴65年。居合道歴62年。城郭研究65年。現在は、朝日カルチャーセンターをはじめ市民センターや周望学舎などで講師を務める。著者に『北九州の城』（1969年発行）、『福岡県の城』（1995年・海鳥社）など多数。